

家庭科の家族・家庭領域の指導内容の検討

—男女共同参画社会との関連で—

和洋女子大学 家政学部 服飾造形学科 吉野那奈美

1. 研究の背景と目的

2018年告示の家庭科の学習指導要領では、男女共同参画社会の推進のために、男女が協力して主体的に家庭や地域の生活を創造する資質・能力を育成することを目指すとされている。男女共同参画社会は、男女が社会の対等な構成員としてあらゆる活動に参画する機会が確保され、共に責任を担う社会である。しかし、現状では男性の家事・育児時間は女性に比べ非常に短く（図1）、男女共同参画の実現のためには、男性が家事・育児に主体的に参画することが求められている。本研究では、男性の家事・育児への関与の阻害要因と促進要因の分析を行い、その内容をもとに男女共同参画社会についての家庭科の指導内容を検討することを目的とする。



図1 仕事をしている人の「仕事のある日」の家事等と仕事の時間資料）内閣府（2019）『男女共同参画白書 令和2年版』

2. 研究方法

文献調査とともに、厚生労働省等のWebサイトの記事、裁判の判例などの資料から事例を調べ、男性の家事・育児への関与の阻害要因及び促進要因を分析する。分析をもとに、高校の家庭総合の教科書の記述を参考に家庭科における指導内容を検討する。

3. 結果及び考察

(1) 男性の家事・育児への関与に関わる要因

男性の家事・育児への関与の促進要因としては、職場の理解、職場の促進の体制、職場への本人の働きかけ、社会や職場、自分自身への理想、子どもや自分の成長の実感、仕事と家庭の両立への工夫などが挙げられる。阻害要因としては、主に、職場の人からの冷たい視線、パタニティハラスメントが挙げられる（表1）。また、夫の予想以上の妻の分担要求で仕事を制限せざるを得ず（FWC（family work conflict, 家庭から仕事への葛藤））、しかし両立を目指して頑張ろうとするものの疲れがたまり、家庭生活にも影響する（WFC（work family conflict, 仕事から家庭への葛藤））という仕事と家庭の板挟み状態が生じている事例がみられた（図2*1）。以上の結果から、子育て中の人への職場や社会全体の理解など、外部の理解や支援が必要であること、夫婦相互の理解不足を解決するコミュニケーションを促す支援も必要であることが窺われる。

*1 おおたとしまさ,2016,『ルポ父親たちの葛藤 仕事と家庭の両立は夢なのか』（PHP研究所）に掲載された事例より作成

表1 事例から確認できた阻害要因・促進要因

	阻害要因・板挟みの要因	促進要因
本人	・妻とお互いに理解し合えない ・家庭と仕事の両立の難しさ ・過労によるストレスで体調悪化	・家事や育児に対するやりがいや楽しみ ・育児を通して自分の成長 ・職場、社会、自分への理想 ・妻には、生き生きと働く姿を子どもに見せて欲しい
家族	・妻のストレスによる攻撃や理不尽な態度 ・育休取得に対する周囲の人からの反対	・家族の支え ・子どもの成長の喜び
家庭生活全般	・家事における悩みや不安 ・家事や育児の仕事量の多さ	・妻の苦労を実感 ・子育てへの肯定的な意識 ・仕事と家庭の両立への工夫
職場	・職場の支援体制の不備 ・育休により仕事が与えられなくなる（パタニティハラスメント） ・職場の人からの冷たい視線	・職場の理解 ・職場への働きかけ ・職場の促進の体制
地域や社会	・育休が進んでいない ・子どものことで仕事を休むことに対して厳しい評価	・育児参加による社会関係の広がり ・ゆとりある働き方や国が仕事を用意する

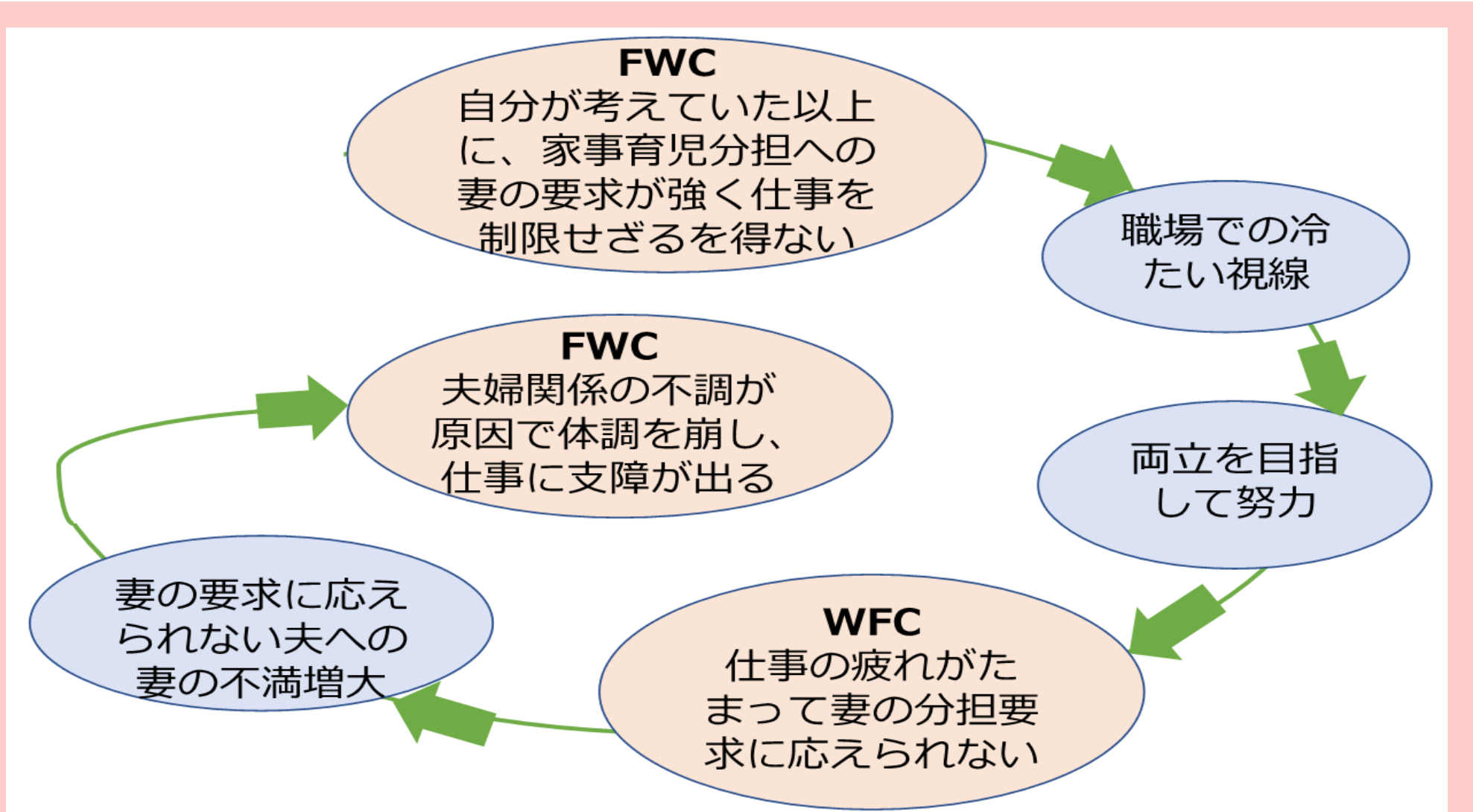


図2 仕事と家庭の板挟み状態の事例

(2) 家庭科教育の指導内容との関係

現在の家庭科の指導内容を検討すると、現状の男女の役割分担の問題点や目指すべき社会の姿などの説明は充実しているものの、さらに、理想と現実のギャップが生じる原因を考察し、解決策を探求する主体的な取り組みや、仕事と家庭の板挟みでの苦労や、両立させている男性の工夫を経験者から聞き取るなど、体験的な学習を積極的に組み入れる指導の充実が求められる。

4. 総括

男性の家事・育児への関与の事例をもとに促進要因と阻害要因の分析を行い、職場の理解、社会からの支援、夫婦関係を育てる工夫などが重要であることが示された。分析結果から家庭科の指導を検討し、理想と現実のギャップの生じる原因の考察や解決策の探求、体験的な学習を積極的に組み入れる指導の充実が示唆された。